



『職場の労働運動』のこと

東京農業大学教授 小松 善雄

「おまえたち、働いているか。動いているだけでないのか」

——挨拶代わりにこういつて、飄々と社屋に入ってくる男がいた。

がっちりした体形で精悍さを漲らせ、火の玉のような人である。労働旬報社がまだ、港区西久保巴町にいた時代である。まわりの人に聞くと、その人が内山光雄さんであった（社内では「内山さん」、「内山さん」と呼んでいたもので、ここでもそう呼ばせていただく）。

労働旬報社が「内整理」に入り事実上の倒産で齟齬していたある日、木曾哲夫社長と柳沢明朗編集長の御二人から編集室に呼ばれた。単刀直入、「小松、内山さん付けの編集者をやらないか」というのである。「先輩編集者を措いてなぜ、私が」というと、「内山さんは個性の強い人だから、怒鳴られることもある。お前は打たれ強そうだから、やれ」というのである。

そのとき、大学時代、中央大学で学生運動をやっていた私は自治会が派遣するクラス・オルグの一助のために、——理解できたとはとてもいえなかったとしても——総評が「ニワトリからアヒルへ」の転機をつくった、内山さんの「幹部闘争から大衆闘争へ 北陸鉄道労組の経験を中心として」（労働法律旬報社、一九五四年）、つづく「職場闘争・職場オルグ 統・幹部闘争から大衆闘争へ」（労働法律旬報社、一九五九年）を読んでいたので不思議な縁だな

あと思ったものである。

実は内山さんは、この時期、労働旬報社の再建のため原稿料抜きで自著を発行することを提議してくれていたのである。そして内山さんの胸中にはその自著のタイトルも決まっていた——「職場の労働運動」。

こうして私は内山さん付けの編集者になったのであるが、私の仕事は、当時、私鉄労連の副委員長を務め各地の私鉄労組の団交支援・争議指導の激務の合間を縫って書かれた原稿の一束、一束を心して読み感想を述べることであった。内山さんは「お前が理解できるように書かれているかを原則に見ろ」といわれたので自由にわからないところを述べ、内山さんから二度とはない「講義」を受けることができた。

怒鳴られることもなく、一作が仕上がるたびに川崎市向ヶ丘のご自宅に招かれ、内山さんに永年連れ添って人生の甘いも酸いも弁えられ、豪放磊落であっても心配りの人であったあの内山さんも唯々諸々に終始させていた奥様、一枝様から東京では味わえない、手造りの石川県の地場料理を振る舞っていただいたひと時も忘れえぬ思い出である。

結局、「職場の労働運動」は「上」が「要求づくりと団体交渉」、「下」が「合理化とたまた組織づくり」の二冊なつてまとめられた。

「職場の労働運動」は、日本の労働運動が弱くなったのは職場の労働運動が弱くなったからだ。まっとうな産業別労働組合は職場の労働運動に根差してこそつくれる」という内山さんの年来の信念を心血注いで吐露したものである。同時に労働旬報社再建のスタートを画した本でもあったといえる。内山さんのおかげで編集者冥利に尽きる仕事をさせてもらえたことは、私の人生にもとても大きな幸せである。

その後も内山さんとは『賃金と社会保障』の存続にかかわって何度かお会いしたが、そうした折、もともとお寺の出である内山さんが、当時出たばかりの、新興仏教青年同盟の妹尾義郎氏の鮮明な生涯を描いた『仏陀を背負いて街頭へ』（岩波新書一九七四年）に触れられ、あれはいい本だ、とぼろつと言われたのがいまも記憶に生々しい。